

大賞

かかのてをつないで

名古屋市立八事東小学校 1年 藤本 千尋

おかあさん「の」てをつなぐ。こくこのプリントで×になったこたえです。せいかいは「と」。せいかいが一つだけなんて、いつたいたいだれがきめたんだろう。

わたしのかかはしようがいがあつて、にがてなことがおおいのでたすけがひつようです。たとえば音だらけのぼしょですぐすこと。かかは音がたくさんあるところでは、あたまがいたくなつて、すぐくつかれてしまいます。それに、人のこえもじょうずにきこえなくなるので、どうしてほしいかおはなしすることもできません。だからわたしはかかがつらそうだったら、てをひっぱつて、しずかなぼしょににがしてあげます。ほかに、バスにのること。かかのうみそは、バスをこわいものだとかんちがいているので、パニックになつてかかをいじめます。きもちわるくなつたり、くるしくなつたり、たいへんそうです。だからわたしは、フラフラのかかのてをひっぱつて、バスをおりるおてつだいをします。

もちろん、かか「と」てをつなぐこともいっぱいあります。ぶんだんのしゅうごうばしょにいくときやいっしょにあそぶとき、おかいものや、ただてをつなぎたいきぶんのとき。かか「の」てをつなぐときも、かか「と」てをつなぐときも、わたしはどつちもだいすきで、かかといっしょにいられてうれしいとおもっています。こどもがおとなのてをひっぱつてあげるのはへんですか？わたしはふつうだとおもいます。かぞくだからじゃありません。こまったときにたすけるのは、あたりまえだからです。「たいへんだね」「えらいね」じゃなくて、いっしょにたすけてくれたらいいのにとおもいます。「の」がせいかいにはならなくていいけど、そういうときがあることはしつてほしいです。そして、みんながだいじな人「の」てをつないで、たすけてくれるみんな「と」つながつて、そうやって、いつか大きなきずなをつなげたらうれしいなとおもっています。

【審査評】

作者にとつて、かか「の」手をつなぐことと、かか「と」手をつなぐことは同じではない。かか「の」手をつなぐ時は、障害者である母が困っている時であり、かか「と」手をつなぐ時は、母と遊ぶ時や母と一緒に手をつなぎたい時である。つまり、「つながり」には困った人を助ける時の「つながり」と、心と心を通じる「つながり」の二通りあることになる。ともすれば忘れがちな前者の「つながり」を、作者は大好きな母との日々のくらしの中から鋭く大人たちに問いかけている。大賞にふさわしい、深い愛情と社会性をかねそなえた秀作である。 佐藤典司

「かかの手をつなぐ」と「かかと手をつなぐ」。たった一文字「の」と「と」が違うだけでこんなに大きな違いがあることを見過してきたことを反省し、小学生が当り前のようにそれに気付いて日常を送っていることに感嘆します。そして「の」と「と」の違いを上辺の解釈だけ教え、画一的な見方だけで間違いととして処理してしまう教育の浅はかさを痛感します。子供が大人の手を引っ張ってあげることは普通のことです。大事な人の手をつないで助けあうことは当り前のことです。それを忘れてしまった人達に、それは当り前じゃないと思っっている人達にこそ読んでもらいたい素晴らしい作品です。 吉田幸司

